



屏風のようにたつ岩の間を流れる吉野川(吉野・白文治撮影)

【特別寄稿】馬場 基氏の聖武天皇宮流行幸考—「天平の大ビンチ、もうこうなったら吉野に行こう」

【編集】吉野歴史資料館（奈良県吉野郡吉野町宮滝348）【発行】吉野町教育委員会事務局（奈良県吉野郡吉野町上市133）

【発行日】平成28年10月1日 【ご意見・本誌購読お申込み等お問合せ先】吉野町教育委員会事務局（tel:0746-32-0190、fax:0746-32-5689、mail:syakai_e@town.yoshino.lg.jp）※吉野歴史資料館は平日のご利用には予約が必要です。



銀の板と近未来?
自称、記者（ある意味ハラッチャ）
のモミであります。先日、吉野歴史資料館の入り口に新しいコーナーが出来ていたので、早速報道台であります。

資料館の入り口を入ってすぐの右手に、いつの間にやら、ノートサイズ大の薄い板が置かれていたんだ。片面は銀色に光って、もう片面はガラスのようになっている不思議な板。なんだこれ?と思つて持ち上げてみると、そこには…。板の動きに合わせて景色が動く、不思議な写真が映しだされていたんだ!…なし、この未来技術?

遡る気持ちを押さえ、解説板を読んでみる。フムフム、板の名前はiPadといふらしい。で、360度撮影で

きるカメラで撮影した吉野町各地の写真を、見れるようになした。現地に行かななくても、その場所にいるかのような景色を見れるなんていふね。

い時代だね。

資料館 外へ外へ。

今年は、権原考古学研究所附属博物館で毎年やっている人気を博す展に出品したり、近鉄との連携座談会始めたりと、資料館の動きがやけに活発。ダイダイやってるよ。



そ

今

回

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

木

の

三

天平の大ピンチ、もうこうなつたら吉野へ行こう

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 馬場 基

1. 天平の大ピンチ

天平七年という年は、とにかくさんざんだった。夏の初めには日照りが問題になつた。そうこうしている内に、九州で疫病が蔓延する。この疫病は「天然痘」という前近代では破壊的な威力を持つ伝染病だつたらしい。古代の医療知識では病原を知る由もない。悪い鬼というか気というか、そういうものの仕業と考えられた。とする、この悪い鬼の上洛を防げといふことで、九州から近畿へ至る街道では、あちらこちらで祀りが行われた。

だが、この防護策は十分な効果を發揮しなかつたらしく、被害の拡大が記録されている。朝廷では天武天皇の子息で皇族の重鎮である二人の親王、新田部親



王が九月に舍親王が一月に相次いで亡くなつた。死因が天然痘だという記録は見当たらないが、何せ時期が時期である。

この時まで、日本の古代国家は、そこ

所では先例や慣例を看ぎと積み重ね、もうすこばかり行政事務の運営にも馴れた。将来を嘱望された首皇子も即位した。青年天皇・聖武は、元正土皇や重鎮の皇族達と、法律や行政に精通した藤原氏が共同でがつちりパクアップする。地方支配も順調だ。地方豪族の財政権限を朝廷に移管する作業も進んだ。九州南部の隼人たちもおどとなしくなつて、反乱という話はない。東北も、それなりに平稳に支配強化を進められている。対外関係も、

幸いにして、翌天平八年には疫病流行は若干の落ちつきを見せる。だが、この年も天候は今ひとつだつたらしく、なんとか疫病の再発を防ぎ、体制を立て直さなくてはならない。

とはいえ、「ワクチン」を用意して予防接種を行くわけがない。現代感覚で

「治療」っぽい対策は、せいぜい食事の注意事項とか、手当の仕方とか、そのぐらいで、後は「おまじない」だ。國家存亡の危機に、天皇自らおまじないに参加

しないわけにはいかない。かくして天平八年夏は六月二七日、聖武天皇が向かつたのが、そう、吉野である。

吉野。古来仙境とされ、聖なる力に満ちるとされた地。天武天皇が、壬申の乱で天下を押さええるその力を蓄えた地。古代国家の出发点の一つで、国を育む靈力が天皇の身体へと浸透する、そんな土地である。未曾有の国難に打ち勝つ、國を立て直すために、天皇が心身を淨め、力を蓄えるには、まことに相応しい。

さて、「二条大路木簡」と呼ばれる、木簡群がある。総点数七万点を超えるこの木簡群の中に、吉野行幸に關係する木簡が含まれる。(続)日本紀の吉野行幸の記載は簡略を極めて実に素っ氣なく、「ちよつとした外出」程度にも見えるのだが、木簡から見ると、吉野行幸はなかなか盛大だ。すくなくとも、光明皇后は同行している様だ。さらに、聖武天皇の寵愛を受けた「文基」という女性の名前

も見えるから、彼女も同行していたのだろう。随行のメンバーも雪だるま式に増える。食料や物品、さらにはそれを運ぶ人も



写真 吉野行幸に關係する二条大路木簡
(独法) 国立文化財機構奈良文化財研究所提供

増ええる。

そして、「唐鬼」を食べる九頭の龍だとか、山陽道を西に退けたとか、二条大路木簡の端々には、「天然痘退散」の祈りが現れる。天平八年の吉野行幸を、象徴しているよう思われるでならない。

3. 実はもっと大ピンチ

恐るべきことに、疫病の猛威が最大

だったのは、翌天平九年のことであつた。くだんの藤原麻呂も、疫病で命を落とした。天然痘は、順調に発展してきただけでなく、天皇は、東国行幸を行つことになる。天然痘は、順調に発展してきた古代国家に強烈なダメージを与えた。

だが、この時期の「ピンチ」は疫病による朝廷中枢部の弱体化や、人口減少による國力低下だけではなかつた。対外関係では、新羅との関係が急激に悪化する。ある。